コラム 6-4　虫の声は，声なのか，音なのか

夏にはセミが，秋になるとコオロギやスズムシが鳴き出しますが，私たち日本人は，それを「虫の声」と表現します。日本人は，虫が出す音を「声」として聞く傾向がありますが，欧米人などは，虫が出す音は声ではなく「音」として知覚する傾向があります。

人の声や動物の鳴き声は，声帯という器官が出す音であるのに対して，虫の出す音は物理音（翅と翅を摩擦するなど）であり，音の性質（フォルマント構造）が異なるため，通常脳はこれを区別します。そのため，欧米人など日本人以外の多くは，虫の声を鳴き声ではなく，物理音として聞いているのです。したがって，虫の出す音（鳴き声？）を愛でるという習慣はなく，ある種の環境騒音として知覚しています。

この虫の音（声）の知覚における日本人（および一部のアジア地域の民族）と欧米人等の違いの原因は，母語の音韻構造の違いが関係しているらしいという報告がありますが，それ以外にもいくつかの原因があると考えられています。

近年，ヨーロッパの一部の国では，日本の俳句や短歌に人気がありますが，有名な「閑かさや，岩にしみ入る蝉の声」という俳句は，私たち日本人の多くには「蝉時雨が岩にしみ入るような深山の閑かさ」をイメージすることができますが，欧米人には，虫の声は騒音と同じなので，「岩に響き渡るほどの騒音がしていて，なぜ静けさを感じるのか？」と理解できないことになってしまう可能性があります。ただし，ここで鳴いているセミは，おそらくヒグラシであり，聞いている人はある程度の距離をおいてセミの声を聞いていることが前提です。アブラゼミが近くで鳴いていたら，日本人でも「閑かさ」を感じることはできないでしょう。